アジアの大学の過去と未来：21 世紀における課題

フィリップ・G・アルトバック

（ボストンカレッジ教授）

地中海沿岸から日本にまで及ぶアジア諸国における膨大で多様な大学について一般化を行うことは不可能である。そのうえ、アジアには世界の最も豊かな国も、最も貧しい国もともに存在している。ここでの我々の関心は、21 世紀におけるアジアの大学が、必然的に国際的な知のシステムの一部を成し、国民教育においても中心的な役割を担う機関として直面している課題を理解することにある。大学は、科学と学問のグローバルなシステムの一部を担うと同時に自らの社会に根を下ろしており、つまりは複数の役割を担っているのである。

アジアは、世界の他の地域と同様に、西洋型をモデルとする大学を有している。そうしたすべての大学は、例外なく中世ヨーロッパに誕生し、その結果西洋の組織やカリキュラムを反映している大学に倣って創設された。このことは、豊かな土着の高等教育の伝統を有する諸国についてもあてはまる。

現在の状況を理解するためには歴史的な視点が必要である。アジアにおける大学発展は多様であり、それは歴史によって形成されてきた。アジアの数カ国、すなわち中国、日本、タイは植民地されはしなかったものの、19 世紀に近代大学システムを創設するに際しては西洋大学モデルを採用した。その他のアジア諸国の多くは、大学が創設された時期には、主としてヨーロッパによる植民地支配下にあった。例えば、英国人は南アジア及び東南アジアの大部分で高等教育発展を方向づけ、同様にフランス人はベトナムやカンボジアで、オランダ人はインドネシアで、スペイン人はフィリピンで高等教育発展に関わったのだった。さらに、植民地時代が幕を閉じる頃、アメリカがフィリピンにおいて、日本が韓国と台湾において高等教育に影響を及ぼした。

アジアにおいては、経済発展が高等教育に依存してきたとはいえない。顕著な経済成長率を達成して工業世界の仲間入りを果たした諸国―日本、台湾、韓国、そしてある程度タイやマレーシア―においてさえ、経済発展は知識産業や高等教育に基づいたものでなかった。経済成長の基盤は多様である。そのなかで典型的なパターンは、基礎的な教育と読み書き能力を有する低廉な労働力に基づく産業化であり、相対的に単純な工業製品や重工業製品の輸出に依存したものであった。場合によっては、（マレーシアの原油やゴムのような）原材料や農産物もそこに加わった。

相当量の教育投資が一定の役割を果たしたことは確かだが、新規産業向けの労働力に適切な

識字及び関連技能を身につけさせたのは初等教育であり、中等教育もある程度はそれに寄与した。高等教育は重視されることはなく、それゆえほとんどすべての場合、大学システムは当該年齢集団のわずか数パーセントが在籍するだけの小規模なレベルにとどまっていた。大学は主としてエリート集団に対してサービスを提供してきたのである。

現代において、アジアの高等教育システムは顕著な発展を見せている。特に、アジア諸国は全体として世界において最も急速な成長を経験してきた。アジアは、量的には発展してきたにもかかわらず、研究及び全般的な大学の質の点で世界レベルの大学を創出するのに遅れをとっている。日本のいくつかの大学がこの地位を獲得しているに過ぎない。中国、韓国、シンガポール、台湾においても顕著な発展が見られる。

21 世紀に入って、アジアの高等教育は大きな課題に当面しつつある。もちろん、こうした課題は世界の他の地域における大学も同様に直面しているものではあるが、多くのアジア諸国が質的および量的な拡大を目指しているがゆえに、アジアの状況においてとりわけ重要である。こうした課題には、以下のものが含まれる。

・現在も進行する大衆化
・アクセス
・アジア高等教育における私立セクター
・多様化とシステム
・アクレディテーションと質の保証
・研究及び研究インフラの発展
・教授職
・グローバリゼーション、国際化、アジアはいかに世界と関係を維持するのか

以上のような課題が、来たるべき時代においてアジア高等教育をめぐる議論の中心をなすことになるであろう。